

## イスラムの礼拝の呼びかけ、コミュニティを作り出す声

八木久美子

我々の日常は、さまざまな音に彩られている。そして聞こえてくる音によって、今自分がどのような場所にいるかを理解する。かつては長期にわたる外国生活を終えた人にとって、さお竹売りの独特の声、豆腐屋の鳴らすラッパの音は自分が日本にいることを実感させるものであった。地域によっては、夕方どこかからともなく聞こえてくる「夕焼け小焼け」の旋律もこうした音のリストに加わったかもしれない。

聞こえてくる音によってその空間は特徴づけられ、特定の空間としての意味を帯びる。「サウンドスケープ」(音の風景)という概念を提唱したのは、カナダの作曲家、マリー・シェーファーであるが、これについて鳥越は次のように的確に説明している。「私たちにとって今、最も大切なことは、自分自身の身体を通じて、日々の生活のなかで周囲の世界をどのように感じるのか、それぞれの空間をどのように読み込み、その環境をどのように捉えるのかということである。このことを、聴覚を切り口に私たちに呼びかけているのがサウンドスケープの考え方なのである<sup>1)</sup>。」

人は目を閉じることはできても、耳を閉じることはできない。自分の意志とは関わりなく聞こえてくる音は、そこがどのような意味を持つ場所なのかをその人に伝え、それによって自らがいるべき場所か否かを判断する大きな手掛かりを与えていると言ってよいだろう。

本論では、イスラム教徒として生きる人々にとってかけがえのない音、アザーンと呼ばれる礼拝の呼びかけの声に焦点を当てる。イスラム教徒にとって、アザーンはどのような意味を持っているのか、それは単に礼拝の時が来たことを告げるだけのものなのか、についてあらためて問い直してみたい。

### アザーンとはなにか

アザーンについての詳細な議論に入る前に、イスラムにおいて音が占める位置、あるいはその「音文化」について簡単に見ておきたい<sup>2)</sup>。イスラムは音楽を否定していると言われることが多いが、これには少し説明が必要である<sup>3)</sup>。器楽については否定的な見方が示されることが多いのは確かであるが、声楽については条件付きながら許容されることも少なくない。

さらにアザーンが歌うように唱えられるだけでなく、コーランも抑揚をつけ、さまざまなスタイルで朗読される。すなわち、厳密な意味での宗教的な文脈においてすら、聴覚的な美しさが求められる傾向は強いのである。しかしながら、イスラムの論理においてこ



これらの実践が承認されるのは伝えられるメッセージ、言葉の意味ゆえであり、旋律の美しさや節回しの見事さゆえではない。オングに倣って、世界の多様な文化を「声の文化」と「文字の文化」に分けて考えるとすれば<sup>4</sup>、イスラムは「声の文化」の代表である。知識を伝えるにあたって書き記して文字で伝えるのではなく、イスラムでは声で伝えることを重視する。

唯一神は預言者ムハンマド（570?-632）に、天使ガブリエル（ジブリール）を介して、口伝えで自らの言葉を授けたとされる。ムハンマドもまた、その神の言葉を自らの肉声で人々に伝えた。そうして伝えられた神の言葉がまとめられたコーランは、実はムハンマドの存命中は文字にされることはなく、「ムスハフ（mushaf）」と呼ばれる形、つまり書物の形にされたのは、第三代正統カリフ、ウスマーン（在位 644-656）の時代になってからである。ムハンマドが生きていた時代、コーランは声としてのみ存在した。

印刷された書物としてのコーランが巷にあふれる今日においても<sup>5</sup>、コーランは目で文字を追って意味を理解すべきものである以前に、声に出して読み上げられ、耳を傾けられるべきものとされる。アラブ圏のようにイスラムが支配的な地域では、タクシーで運転手がコーラン朗誦を聞いていることもあれば、店に入るとあたかもBGMのようにコーランの朗誦が流れていることもある。

ただ、コーラン朗誦よりも確実に、そして間違いなく頻繁に聞くことになるのは、礼拝の時刻が来たことを告げるアザーンである。毎日五回、礼拝の時刻が来たことを告げる、歌うような声がモスクのミナレットと呼ばれる塔から聞こえてくるのである。

礼拝は五行の一つ、つまり信仰告白、喜捨、断食、巡礼と並んで一人ひとりのイスラム教徒が果たさなければならない義務である。一日五回、定められた時に、定められた様式で行なわなければならない。通常の礼拝は自宅や職場で、一人で行なってもよいが、金曜日の正午の礼拝だけは、モスクに行き、集団で行なうべきだとされる。

礼拝の時間については、少し説明が必要である。五回の礼拝が、それぞれ「夜明け（ファジュル）」、「正午（ズフル）」、「午後（アスル）」、「日没（マグリブ）」、「夜（イシャー）」と呼ばれることからわかるとおり、礼拝の時間は太陽の位置によって決まっている。当然のことながら、場所によっても、そして季節によっても時間は異なる。たとえば2022年9月19日の札幌の「夜明け」の礼拝は3時41分だが、福岡では4時39分と一時間ほどの差がある<sup>6</sup>。また言うまでもなく、夏になれば「夜明け」の礼拝は早くなり、冬になれば「日没」の礼拝が早くなる。人々はアザーンによって礼拝の時が来たことを知る。

アザーンを唱える人はムアッジンと呼ばれるが、イスラムの歴史上最初のムアッジンはビラール・ブン・ラバーフ（580?-640）という人物であった<sup>7</sup>。ビラールによってアザーンが始められたことについて、どのように語り継がれているのであろうか。預言者ムハンマドの伝承、そしてその伝記からアザーンの始まりに関する部分を見てみよう。

イブン・ウマルによると、メディナに来た初めの頃、ムスリムたちは礼拝へ呼びかけられることなしに、集まって礼拝の時を待っていた。或る日、このことについて話していると、ある人は、キリスト教徒のように銅鑼をならせ、と言い、他の人は、むしろユダヤ教徒のようにラッパを吹いてはどうか、と言った。そこでウマルは、なぜ汝らは礼

拝の時を告げるために人を遣わさないのか、と言い、これを聞いて神の使徒はビラールに、「さあ、立って、礼拝を呼びかけよ」と命じた<sup>8</sup>。

イブン・イスハークの『預言者ムハンマド伝』は、アザーンについての決定がなされる経緯をさらに詳しく記している。少し長くなるが引いてみよう。

神の使徒がメディナに来た当初は、まだ礼拝の呼びかけはなかったので、人々は礼拝の時刻を見はからって使徒のもとに集まった。そこで神の使徒は、ユダヤ教徒のように角笛を使って礼拝の呼びかけをしようと考えたが、取りやめた。次に、信徒に礼拝の時刻を知らせるための拍子木を作らせた。そうこうするうちに、バルハーリス・ブン・アル・ハズラジュ族のアブドゥラー・ブン・ザイド・ブン・サアラバ・ブン・アブド・ラッブフが夢でお告げを聞き、神の使徒のもとに来て言った。

「神の使徒よ。昨夜、幻を見た。二枚の緑衣をまとった一人の男が私のそばを通った。男は拍子木を手にしていたので、彼に語りかけた。

「神の僕よ、その拍子木を売ってくれ」。

「何に使うのか」。

「礼拝の呼びかけに使うのだ」。

「それならもっと良い方法がある」。

「教えてくれ」。

「次のように言うとよい。

『神は偉大なり。神は偉大なり。神は偉大なり。神は偉大なり。私は証言する、神(アッラー)のほかに神(イラーフ)はなし。私は証言する、神(アッラー)のほかに神(イラーフ)はなし。私は証言する、ムハンマドは神の使徒なり。私は証言する、ムハンマドは神の使徒なり。礼拝に来たれ。礼拝に来たれ。成功を求めて来たれ。成功を求めて来たれ。神は偉大なり。神は偉大なり。神(アッラー)のほかに神(イラーフ)はなし』」。

神の使徒はこの話を聞くと、言った。

「それは真理を伝える夢である。神の思し召しにちがいない。ビラールのところに行って、その文句を伝え、礼拝を呼びかけるアザーンとせよ。彼のほうがお前より、よく透る声をしているから」。

ビラールが、その文句でアザーンを行なうと、ウマルは家の中でそれを聞いた。あわてて上衣を引きずりながら、神の使徒のもとに駆けつけて言った。

「神の預言者よ、あなたに真理を託して遣わした御方にかけて、私も彼と全く同じ夢を見た」。

神の使徒は言った。

「神に讃えあれ」<sup>9</sup>。

こうして、イスラムでは礼拝の時を告げるのに肉声がいられることになった。注目したいのは、ビラールがムアッジンとなったのは、彼が「よく透る声」の持ち主であったからであり、彼が特に傑出した人物であったからというわけではないという点である。これ

についてはあとで再び触れるが、—— キリスト教の鐘の音に対して —— イスラムでは礼拝の時刻になると、定型のアラビア語が響き渡ることが特徴として捉えられるようになる。

## アザーンの伝えるメッセージ

シーア派では若干の違いがあるもののイスラムの圧倒的多数派であるスンナ派では、アザーンは世界中どこでも、『預言者ムハンマド伝』に記された通りの文言がアラビア語で唱えられている<sup>10</sup>。アザーンの構造がわかりやすいよう、繰り返される回数をカッコに入れて書き直すと次のようになる<sup>11</sup>。

- アッラーは偉大なり。(4回)
- アッラー以外に神はないと私は証言する。(2回)
- ムハンマドは神の使徒であると私は証言する。(2回)
- いざや礼拝に来たれ。(2回)
- いざや成功を求めて来たれ。(2回)
- アッラーは偉大なり。(2回)
- アッラー以外に神はない。(1回)

たった七つの短い文からなるため、あっという間に終わってしまうかのように思われるかもしれないが、実際にはアザーンは各文がカッコ内の回数繰り返され、さらにゆっくりと唱えられるので、少なくとも二～三分は続く。抑揚をつけられ、美しく唱えられるので、それと知らなければ歌のように聞こえるだろう<sup>12</sup>。

しかしイスラム教徒にとってアザーンが持つ意味の重要性を理解するには、その聴覚的美しさではなく、それが伝えるメッセージを見なければならぬ。文言をよく見ると、アザーンは「いざや礼拝に来たれ。いざや成功を求めて来たれ」と人々を礼拝へ誘うだけではなく、イスラムの教えのエッセンスとでも言うべきものを伝えていることがわかる。まず、「アッラーは偉大なり」と「アッラー以外に神はない」という部分は、神の絶対性、唯一性というイスラムの根幹をなすものである。このフレーズは人々の暮らしのなかに浸透しており、日常会話にもしばしば織り交ぜられる。

さらに「アッラー以外に神はないと私は証言する。ムハンマドは神の使徒であると私は証言する」の部分は五行の一つ、信仰告白の文言そのものである。「アッラー以外に神はないと私は証言する」によって自らが一神教徒であることを、そして「ムハンマドは神の使徒であると私は証言する」によって —— ユダヤ教徒でも、キリスト教徒でもなく —— イスラム教徒であることを確認するという作りになっており、イスラムに入信あるいは改宗する際には二人の証人の前でこの文言を唱えなければならない。そしてひとたびイスラム教徒になれば、礼拝の度にこれを唱えることになる。

アザーンは一義的には、時を告げる音であるという点で教会の鐘や寺院の梵鐘と同じであるが、しかし声であり、言葉であるという点でアザーンはそれらとは異なる。一日に五

回、アザーンは繰り返し、イスラムの教えの根幹を人々に告げ知らせる。

毎日五回、歌うかのように抑揚をつけて美しく唱えられるこの文言は、無意識のうちに人々の記憶に刻みつけられる。イスラムの聖典コーランは、神から天使を介して口伝えで預言者ムハンマドに授けられ、さらにそれがムハンマドから教友達へ、さらに次の世代へ、やはり声によって伝えられた。アザーンはまた、そうした「声の文化」としてのイスラムの伝統のなかに生きていと捉えることができる。

## アザーンが顕在化させるイスラム教徒コミュニティ

ここで、マリー・シェーファーの二つの用語を用いてアザーンの役割について考えてみよう。マリー・シェーファーは、「視覚における図と地の関係においては地にあたるもの」としての「基調音」に対して、「人が特に注意を向けるすべての音」であり、図と地の対応においては図にあたるものを「信号音」と呼ぶ。そしてそれとは別の次元で、「その共同体の人々によって特に尊重され、注意されるような特質を持った共同体の音」を「標識音」と名づけている<sup>13</sup>。

すでに見たとおり、アザーンは一義的には礼拝を行なうべき時が来たこと人々に告げるものであり、その意味において「信号音」であることは明らかである<sup>14</sup>。しかしながら、アザーンが埋め込まれるコンテキスト、それが聞かれる場所の歴史的、社会的な背景が変われば、アザーンの持つ意味、果たす役割も違ってくるのではないか。

今日、歴史的に「イスラム圏」と呼ばれた地域の外に、多くのイスラム教徒が生活している。人々の往来が世界規模になるにつれ、それまでキリスト教が支配的であり、換言すれば教会の鐘の音が響き渡っていた場所にイスラム教徒のコミュニティが誕生し、モスクが作られることは珍しくない。モスクの建設自体が古くからの住民とのあいだに摩擦を起すこともあるが、近年、欧米の事例としてさかんにメディアで取り上げられているのは、モスクからアザーンが流されることをめぐっての論争である。ニューカマーであるイスラム教徒の住民にとって、そこにアザーンが流れることはその場所がイスラム教徒のいるべき場所となったことを意味する一方で、何世代も前からそこに生活するキリスト教徒の住民には、自分たちの生きる空間が性格の変更を迫られていると感ぜられるということであろう<sup>15</sup>。

すでに説明したとおり、七世紀のアラビア半島で最初に唱えられたアザーンはビラールの生の声であった。しかし今日のアザーンは、拡声器を使って大音量で流される。多種多様な音が昼夜を問わず鳴り響く今日の都市において、そうしなければアザーンは周囲の様々な音に埋もれ、呼びかけとしての意味をなさない<sup>16</sup>。そしてそのことが欧米諸国などイスラム教徒コミュニティが誕生、拡大している場所で、アザーンを「騒音」と捉え、排除しようという動きを生む背景にある。

具体的な例をふたつ挙げよう。ひとつはアメリカの例である。2004年、アメリカ、ミシガン州のデトロイト郊外にあるハムトラムの町でアザーンをめぐって問題が起きた。この一件は広く注目を集め、日本でも報じられている。イスラム教徒の住民がモスクから拡

声器を用いてアザーンを流すことについて当局に許可を求めたところ、騒音規制条例に抵触するか否か、さらにそれを禁じるとすれば宗教的実践の自由を保障した憲法に反するか否かが問われ、大論争になったのである。最終的には、教会の鐘の音と同じであるという見地から、アザーンを流すことが地方議会で正式に認められたものの、すべての住民が納得しているとは言いがたいようだ<sup>17</sup>。

ハムトラムについて簡単に見ておこう。この町は伝統的にはポーランド系のカトリック信徒が多く、かつては言わば教会の鐘が鳴り響く空間であった。しかしアメリカの他の地域と同じく、近年、様々な文化的、宗教的背景を持つ人々が急激に増え、この町では新しい住民の多くをバングラデシュ、イエメン、ボスニアなどからやってきたイスラム教徒が占めていたという<sup>18</sup>。キリスト教の色彩を帯びていた町が、徐々に、しかし着実にイスラム教徒の町へと性格を変えつつあったということである。そのなかでさらに、拡声器を使ってモスクからアザーンが流されれば、それはこの町に暮らすすべての人々の耳に入ることが避けられず、町のサウンドスケープが変化し、それによって町の性格が変わったことが顕在化されることになる。このことが大論争につながったのである<sup>19</sup>。

たしかに、アザーンを許容しない根拠として公の場で挙げられたのは、それが騒音であり、騒音規制条例に違反するという点であった。しかし実際には、アザーンを許可することで、ハムトラムにおけるイスラム教徒コミュニティの存在を「公式に」認めることへのキリスト教徒住民の反発が大きかったことは間違いない。まさにアザーンは、イスラム教徒コミュニティの存在を示す「標識音」と捉えられたのである。

もうひとつは、2020年のカナダの例である。こちらの例も条件付きであれ最終的にアザーンが正式に認められた点では同じであるが、次の点で先のアメリカの例とは異なる。というのは、こちらではアザーンがイスラム教徒コミュニティの「標識音」であるにもかかわらず容認されたというよりも、アザーンが「標識音」であるからこそ、それによってイスラム教徒コミュニティの存在が確認されるからこそ、認められたという側面があるからである。

少し古い数字になるが2011年当時、イスラム教徒の数はカナダの総人口の2.8%であった<sup>20</sup>。イスラム教徒が総人口に対して占める割合は、アメリカよりもカナダの方がはるかに高い。しかしそのようなカナダにおいても、拡声器を使ったアザーンは騒音という扱いを受け、条例により禁止されていた。カナダの都市で、はじめてアザーンが響き渡ったのは、コロナ禍にあった西暦2020年4月のことである。

2020年4月は、イスラム暦に置き換えると1441年のラマダーン月にあたった。イスラム暦とはメッカからメディナへの聖遷（ヒジュラ）が行なわれた西暦622年を元年とし、1年が354日からなる完全太陰暦である。イスラム暦の9番目の月であるラマダーン月は、イスラム教徒にとって聖なる月であり、祝祭の時である。日中、断食／斎戒が行なわれることはよく知られているが、それ以外にもこの月には普段とは異なる、聖なる月にふさわしい実践が数多く行なわれる。人々はいつにもましてモスクに熱心に通う。金曜「正午」の集団礼拝だけでなく、できる限り人々が集まってともに礼拝を行なうことがよいとされるのはラマダーン月に限られたことではないが<sup>21</sup>、ラマダーン月にはその意識が高まるのである。スンナ派では通常の一五回の礼拝に加え、夜半にタラーウィーフという特別な礼

拝を行なうこともある。また、普段以上にイスラムの教えに従った振る舞いをしようとする傾向が高まり、慈善活動も盛んになる。そうした活動の拠点も、モスクになることが多い。ラマダーン月にモスクに行かない、ということは考えにくいのである。

日中がこのように一種の厳粛さを帯びているのに対して、日没後のラマダーン月は賑やかで楽しい、まさに祝祭といった状態になる。日没が近づくと、毎日のように家族、親族、友人が集まり、日が沈むとすぐに、いつもよりも豪華な食事を共にする。そのあとは夜遅くまで、ときには明け方までおしゃべりを楽しみ、街に出かけ、華やいだ時間を過ごす。人が集まりともに時を過ごすことのないラマダーン月など考えられないと言っても過言ではない。

しかし2020年あるいはイスラム暦1441年はまったく様子が違っていた。この時、カナダはコロナ禍のただなかであり、ロックダウン下の街は奇妙な静けさに包まれていたのである。ラマダーン月が来ても、親族や友人と集まることはおろか、人々はモスクに行くことさえできない。実際、できるかぎりラマダーン月にふさわしい時を過ごそうと、オンラインで連絡しあい、さまざまな試みがなされはしたが、例年のあの高揚感は味わえるはずもなかった。

こうした状況に鑑みて、イスラム教徒住民の感情を慮り例外的な対応として取られたのが、ラマダーン月限定で、「日没」の礼拝の時刻を知らせる——言い換えれば、断食の時間が終わったことを告げる——アザーンに限り、拡声器を使って流すことの許可である。2020年4月、トロントのマディーナ・モスクというモスクからはじめてアザーンが流された<sup>22</sup>。トロントのイスラム教徒住民は、たとえともに食卓を囲むことはできなくても、アザーンを同じ思いで聞いている人々がこの場所にいることを実感したに違いない。そして自分たちの存在が「公式に」認められたという感覚を抱いたのも間違いないだろう。イスラム教徒の住民のなかには、カナダの土地ではじめてアザーンを耳にした時、感動のあまり涙した者もいたという。

付け加えておくと、アザーンをめぐったこうした論争は北米に限られたものではもちろんない<sup>23</sup>。オランダのアムステルダムでも論議の末に、2019年11月から金曜日に限ってアザーンが流れるようになった<sup>24</sup>。ドイツのケルンでも、2021年10月、許可を得たうえで金曜の午後に五分間、一定の音量でアザーンを流すことができるようになった<sup>25</sup>。日本に関して言うと、筆者が訪問した東京のあるモスクでは、アザーンはモスクの建物のなかでのみ流されていた。礼拝の時刻になったことを告げ知らせる役割を果たすのがアザーンであるとするれば、それでは意味がないとも思えるが、近隣住民に配慮してそうしているという。

ある程度の規模のイスラム教徒コミュニティが誕生したとき、そこにモスクが誕生する。モスクは礼拝の場所であるだけでなく、人々をつなぐ結節点となり、様々な活動の拠点ともなる。そしてそこからアザーンが流れることは、そうした人々が生きていることを外に向かって広く告げ知らせる役割を果たすのである。

## コロナ禍で変更されたアザーン

イスラム教徒が少数派である場所において、アザーンがイスラム教徒コミュニティの存在を示すもの、つまり「標識音」として浮かび上がる傾向が強いことはすでに明らかであろう。それに対して、アラブ圏などイスラム教徒が多数派であり、イスラムが支配的な場所では、アザーンの意味が問われることなどありえず、ましてや流してよいか否かが議論されることなど考えられない。

しかしながらコロナ禍によって、そうした場所においてもアザーンについてあらためて考えさせられる状況が生まれた。人々が集まることができなくなり、集団礼拝が行われなくなった結果、従来のように礼拝への参集を求めることが意味をなさなくなったのである。ここでは、エジプトの例を挙げて見ていきたい。

エジプトは、約1億の人口のうち9割強がスンナ派イスラム教徒である。首都カイロには、西暦10世紀にその歴史が始まるアズハル機構というイスラム諸学の教育・研究機関がある。それはスンナ派における学問的中心、つまりイスラム諸学の最高学府であり、アズハル機構が示したイスラム法学上の見解等は国境線を超えてスンナ派イスラム世界で強い影響力を持つ。その意味において、エジプトは聖地メッカのあるサウジアラビアと並んで、スンナ派イスラム世界の中心と言っても過言ではない。

アザーンを抜きにして、数多くのモスクが建ちならぶ首都カイロのサウンドスケープを想像することはできない。とりわけまだ街が動き始める前、薄暗がりのなかで複数のモスクから折り重なるように聞こえてくる「夜明け」のアザーンは独特な世界を作り出す。しかしコロナ禍は、このアザーンに変化を迫った。

エジプトで国内最初の感染者が確認されたのは2020年2月14日のことである。当初は感染者がエジプト滞在中の外国人に限られていたため、エジプト社会における危機感はあまり高くなかったが、3月の半ばを過ぎると、エジプト人のあいだでも徐々に感染者が増加し始めた。人々を動揺させたのは、治療の難しさ、感染力の強さだけではない。この疫病は、イスラム教徒にふさわしい振る舞い、生活習慣を困難にしたのである。人々が集まることが禁じられたため、モスクは閉鎖された。金曜の集団礼拝すら行なうことができなくなった。

さらにイスラム教徒にとって、時期もあまりにも悪かった。コロナ禍による混乱がエジプト社会を襲った2020年3月からの半年間を、イスラム暦に置き換えてみよう。西暦2020年の3月1日は、イスラム暦の1441年のラジャブ月6日にあたる。つまり、西暦2020年の3月から8月は、イスラム暦の1441年ラジャブ月、シャアバーン月、ラマダーン月、シャッワール月、ズル・カアダ月、そしてズル・ヒッジヤ月という6つの月とほぼ重なっていたのである。

この6つの月のうち、ラマダーン月が持つ特別な意味については、すでにカナダの事例に触れた際に説明した通りであるが、ラマダーン月の二か月前のラジャブ月の到来は、ラマダーン月が近づいていることを告げるものとされ、人々は齋戒／断食の月であるラマダーン月を迎える準備を少しずつ始める。メディアでもその年のラマダーン月のイベントについて取り上げられることが増え、人々のあいだに少しずつ高揚感が広がっていく。最近ではラジャブ月の到来を祝い、メールやEカードを送りあうことも多い。

ラマダーン月になると、人々の生活のリズムも、そして町全体の様子も普段とはまった



く変わると言っても過言ではない。日没直後は誰もが食卓に着いているため、街は不思議なほどに閑散としているが、夜の街は食事を終え、散策を楽しむ人であふれる。なお、ラマダーン月が終わると、つまり翌月のシャッワール月になると、齋戒／断食の月であるラマダーン月が終了したことを盛大に祝う。これがイスラムの大祭の一つ、「断食明けの祭」である。

この6つの月の最後に来るのがズル・ヒッジヤ月である。この月には、イスラム教徒が可能な限り一生に一度は行なわなければならないメッカへの巡礼、ハッジ巡礼が行なわれる。そしてこの月の10日に行われるのが、ハッジ巡礼が無事に終わったことを祝う「犠牲祭」である。「断食明けの祭」と並んで、「犠牲祭」はイスラムの大祭の一つであり、世界中のイスラム教徒が羊などの供犠によってこれを祝う。このようにラジャブ月からズル・ヒッジヤ月までの半年間は、イスラム教徒にとって宗教的な儀礼、それに関連する祝祭が続く期間なのである。

しかし2020年、いやイスラム暦1441年のラジャブ月からズル・ヒッジヤ月までの半年間は例年とは様子がまったく違っていった。人々の高揚感に水を差すかのように、ラジャブ月に新型コロナの感染が拡大しはじめ、様々な規制が始まった。集団礼拝が停止され、モスクが閉鎖された<sup>26</sup>。この状況が続けば、ラマダーン月を例年どおりに迎えることはできないのではないかという不安が広がったのは当然であろう。

そうした懸念が的外れではなかったことは、間もなく明らかになる。ラマダーン月になっても、親族や友人とそろって食事をするのができないどころか、夜間に外出することもできず、モスクに行って礼拝することすら依然として許されなかった。集団礼拝の停止とそれに伴うモスクの閉鎖がとりわけ人々の関心を集めたことは、その是非について、イスラム法学者に多くの問いが寄せられ、それへの回答、すなわちファトゥワーが多数出されていることから確認できる<sup>27</sup>。

これに関して注目したいのは、集団礼拝が停止し、モスクが閉鎖されても、アザーンは流れつづけたという事実である。とはいえ、そのような状況のなかで、「いざや礼拝に来たれ。いざや成功を求めて来たれ」と呼びかけることができないのは言うまでもない。アズハル機構のなかにある大ウラマー評議会は、3月15日付けのファトゥワーで、集団礼拝停止をやむを得ないとすると同時に、アザーンは文言を変更したうえで流し続けるべきであるという見解を示した。

大ウラマー評議会は、「いざや礼拝に来たれ。いざや成功を求めて来たれ」の部分を、「あなた方の家で礼拝せよ (Ṣallū fī buyūtikum)。あなた方の居場所で礼拝せよ (Ṣallū fī riḥālikum)」という文言に変えることを決定した。つまり家あるいは今いる場所で祈れという言い方で、実質的にはモスクに集まることを禁ずる文言にしたうえで、アザーンを流すことにしたのである。

聞きなれないアザーンを耳にした現地の人々の驚きは大きかった。人々が受けた衝撃の大きさは、SNSにこのアザーンが流れる街の様子を伝える動画がさかんに投稿され、インターネット上に多くの記事が掲載されたことからよくわかる。アザーンはあまりにも聞きなれたものであり、人々はその文言が変わる可能性など想像もしていなかった。彼らにとって、イスラムの教えが永遠不変であるのと同じように、アザーンも変わることなどな

いはずであった。

イスラム教徒の世界では、子供が生まれるとすぐに、親がその子の耳に向かってアザーンを唱える。アザーンを耳にすることで、その子はイスラム教徒のコミュニティの成員となる。イスラム教徒として生きることとは、アザーンを耳にし続けることと言いかえることすらできるのである。コロナ禍にあって文言が変更を加えられ、モスクに来ることなく家に留まれと呼びかける新奇なアザーンを耳にしたとき、人々が動揺したのは当然と言わざるを得ない。

しかしながら、「いざや礼拝に来たれ。いざや成功を求めて来たれ」の部分で、「あなたの方の家で礼拝せよ。あなたの方の居場所で礼拝せよ」に変えられたアザーンは、実はコロナ禍によってあらたに作り出されたものではない。それは「厄災のアザーン (adhān al-nawāzil)」と呼ばれ<sup>28</sup>、預言者ムハンマドが存命中に唱えられたものであった。ある大雨が降った日にムハンマドが、人々にモスクに集まらず家で礼拝を行なうよう指示したことに由来する。言うまでもなくアラビア半島は乾燥地であり、人々は雨には慣れていないため、ある程度の雨が災害と感じられたとしても不思議ではない。

アズハル機構の大ウラマー評議会が集団礼拝の停止、モスクの閉鎖をやむなしとしながらも、なぜアザーンは停止せず、さらに通常のアザーンとは異なるこの「厄災のアザーン」を流すことを求めたのかについて考えてみたい。

単純に考えれば、集団礼拝が行なわれず、モスクに行くことも許されないのであれば、アザーンは必要ないということになるであろう。政府あるいは保健衛生当局から、礼拝はモスクではなく、自宅で行なうよう指示を出すことで十分だとも言える。しかしそうではなくイスラム法学者は、モスクに来てはならないこと、礼拝は自宅で個々に行なうべきことを「厄災のアザーン」によって人々に伝えることを選んだ。

その理由として第一に考えられるのは、一連の措置がムハンマドの対応に倣った、適切なものと判断し、それを人々に伝えようとしたという可能性であろう。しかしながら、「厄災のアザーン」を流すことで一般信徒が直ちにこうした専門家の論理を理解できるはずはない。だからこそ、家に留まることを命じる声がモスクから聞こえてきた時、人々は混乱したのである<sup>29</sup>。

だとすれば、文言の変更を余儀なくされてもアザーンを流し続けるという判断の背後には、何か別の配慮があったと考えるべきであろう。それは、コロナ禍に見舞われていても、エジプトは毎日定期的にモスクから——文言が変わろうとも——アザーンの声が響きわたる空間でありつづけることの重要性である。それによって人々は、モスクに行くことが許されないという尋常ではない事態が起きているとしても、エジプトは依然として隅々までイスラムの教えが浸透した場所であることを確認する術を与えられたのではないか。人々が不安に駆られ、コロナ禍は天罰、神の怒りによるものではないのかという問いが発せられ、コロナ除けになるという呪術への関心すら高まるなかで、宗教指導者がその使命を果たそうとしたという見方もできるだろう。

イスラム教徒が圧倒的多数派を占めるエジプトにおいて、それまでアザーンは毎日五回当然のように聞こえてくるものであり、とくにその存在意義は意識されていなかったかもしれない。その意味では、コロナ禍以前、アザーンは「視覚における図と地の関係におい

ては地にあたるもの」としての「基調音」であり、この空間がイスラムの教えによって覆われていることを示す「標識音」ではなかったということになる。しかしコロナ禍が迫ったアザーンの文言の変更は、そうしたエジプトのような場所においても、アザーンが単なる音ではなく、メッセージを伝える声であることを気づかせたのである。

アザーンが置かれた環境は、さまざまな理由で大きく変化してきた。こうした事態がアザーンの意味、そのありようについて問い直すきっかけになっていることはすでに明らかであろう。かつてイスラム教徒にとってはあまりに当たり前であり、「時計代わり」でもあったアザーンが、明確なメッセージを持つものとして再浮上している。アザーンは礼拝の時刻になったことを告げるだけでなく、その声が、イスラムの教えを日々の時の流れのなかに刻みこみ、イスラム教徒の生きるべき空間を再生し続けていることが確認されたのである。

## 註

- 1 鳥越けい子『サウンドスケープ——その思想と実践』鹿島出版会、2022年、p.12。
- 2 イスラム世界については「音楽」という概念に変えて、川田のいう「音文化」を用いるのが適切だと考えられる。
- Junzo Kawada (sous la direction de), *Cultures sonore d'Afrique*, ILCCA, Tokyo University of Foreign Studies, 1997.
- 3 八木久美子「音楽の魅力あるいは誘惑——婚礼をめぐるアラブ・ムスリムの語りを中心に」、『総合文化研究』21号、東京外国語大学総合文化研究所、2018年。
- 4 W-J・オング著、桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、2022年。
- 5 オスマン帝国という巨大な市場に向けて、ベネチアで1537年に初めてコーランの印刷が試みられたが、神の言葉を機械で量産することは容易には受け入れられず、1726年、西洋列強の圧力を前によく大ムフティーがその印刷を承認したという。
- Bryan Winters, *The Bishop, the Mullah, and the Smartphone: The Journey of Two Religions into the Digital Age*, Resource Publications, 2015, p.3.
- 6 <http://islamjp.com/salat/salatschedule.htm> (2022年9月19日最終閲覧)
- 7 ビラールはイスラムに入信するものの、奴隷彼は多神教である主人に棄教を迫られ、拷問を受けていたところをのちに初代カリフとなるアブー・バクルに救われている。
- 8 ブハーリー著、牧野信也訳『ハディース・イスラーム伝承集』第一巻、中公文庫、2001年、p.235。「ウマル」とは後の第二代正統カリフのことである。
- なお、「銅鑼」については同頁の別の個所に、「当時、当方キリスト教会で礼拝の時を告げるためにもちいられていた木製の銅鑼のようなもの」という割注がつけられている。
- 9 イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャム編註、後藤明・医王秀行・高田康一・高野大輔訳『預言者ムハンマド伝2』岩波書店、p.40-p.41。
- 10 シーア派では「ムハンマドは神の使徒であると私は証言する」のあとに、「アリーは神の友であると私は証言する」、さらに「いぎや成功を求めて来たれ」のあとに「いぎや至善に来たれ」という文言が加えられる。まさにスンナ派との決定的な差異である（スンナ派では第四代正統カリフ）アリーをイマームとして「崇敬」する姿勢が一日五回、アザーンのなかで表明されている。アラビア語を解する者には、アザーンを聞いただけで、その場所がスンナ派の地域なのか、それともシーア派の地域なのか判断できるのである。
- 11 「夜明け」の礼拝のアザーンのみ、「礼拝は眠りより良い」という文言がこれに付け加えられる。
- 12 コーラン朗誦、そしてスーフィー音楽とともに、アザーンが音楽市場でエスニック・ミュージックの領域に分類されることが多いことはこれを物語っている。
- 13 R・マリー・シェーファー著、鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律——サウンドスケープとはなにか』平凡社、2022年、p.570-p.573。
- 14 人々がアザーンによって知るのとは、礼拝の時がやってきたことだけではない。とりわけ正確に時を示す時計をだれもが持つことなど考えられなかった時代、それは夜が明けたこと、昼になったこと、日が暮れたことを人々に告げ、日々の暮らしのなかで「世俗的な」時間の経過を気づかせるという意味でも、「信号音」であった。その点では、教会の鐘や寺の梵鐘と同じくイスラムのアザーンも、長い間、人々の生活の流れに印を刻みつけ、たとえば、落ち合う約束の時刻を「アスルの礼拝のころ」というように言い表していた。
- 15 ここでは議論をわかりやすくするために、イスラム教徒がニューカマーである地域の近年の例に限定するが、同じような問題は1970年代のシンガポールでも起きている。シンガポールのイスラム教徒は、言うまでもなくその大半は土着の住民である。政府主導の急速な開発が進められるなかで、異なる宗教の住民が混じりあって暮らすことが増え、かつモスクを含めた古い建築が移転を迫られるなかで、拡声器を用いたアザーンが「騒音」として問題となったのである。
- Tong Soon Lee, "Technology and the Production of Islamic Space," Rene Lysloff and Leslie Gay eds., *Music and Technoculture*, Wesleyan University Press, 2003.
- 16 世界で最初に拡声器を用いてアザーンが流されたのは、1936年のシンガポールだという。
- Bryan Winters, *The Bishop, the Mullah, & the Smartphone: The Journey of Two Religions into the Digital Age*, Resource Publications, 2015, p.69.
- 17 2021年9月9日の朝日新聞デジタルに、この一件を踏まえた「かつてはポーランド系八割、今はイスラム過半数、共生さぐる米の街」という記事が掲載されている。
- 18 Isaac Weiner, *Religion Out Loud: Religious Sound, Public Space, and American Pluralism*, New York University Press, 2014, p.162.
- 19 誤解のないよう付け加えておくと、拡声器を使ってモスクから流されるアザーンの音量は気にしなければ済むという程度のものではない。「夜明け」のアザーンは、熟睡している人を目覚めさせるのに十分な音量であり、たとえば仕事や勉強のために中東にやってきた日本人が住居を探す際、すぐそばにモス

クがないことを確認するよう助言されることが多い。

- 20 <https://www.pewresearch.org/religion/2011/01/27/the-future-of-the-global-muslim-population/> (最終閲覧 2022年9月20日)  
この時点で、2030年には6.6%になると予想されている。
- 21 それを示すものとして、「集団礼拝は個人礼拝より27段階も上である」、あるいは「集団礼拝は個人礼拝より25段階も上である」というムハンマドの伝承がある。ブハーリー著、牧野信也訳『ハディース・イスラーム伝承集』第一巻、中公文庫、2001年、p.246-p.247。
- 22 Diane Riskedahl, “The Muslim Call to Prayer in Canada’s Pandemic Soundscape”, *City & Society*, volume 32, Issue 2, August 2020.
- 23 オランダをはじめ、さまざまな地域におけるアザーンをめぐる問題については、下記が参考になる。エジプトのようなイスラム教徒が圧倒的多数派を占める地域でも、拡声器を使い大音量で流されるアザーンには批判的な声が上がることもあるという。Pooyan Tamimi Arab, *Amplifying Islam in the European Soundscape: Religious Pluralism and Secularism in the Netherlands*, Bloomsbury Academic, 2018.
- 24 <https://globe.asahi.com/article/13108605> (最終閲覧 2022年9月20日)
- 25 <https://www.voanews.com/a/german-city-of-cologne-allows-mosques-to-broadcast-call-to-prayer-/6266953.html> (最終閲覧 2022年9月20日)
- 26 重要なのは、エジプトをはじめとする多くの国で集団礼拝が中止されたが、サウジアラビアのメッカのカアバ神殿のあるハラム・モスクと預言者の葬られているメディナのモスクでは限られた人数で金曜の集団礼拝が行なわれ続けたという点である。これら二つのモスクで集団礼拝が行なわれ、その模様がインターネットや衛星放送テレビで伝えられたことは、イスラム共同体が健在であることを世界のイスラム教徒に確認させることになった。
- 27 Mas’ūd Ṣabrī, *Fatāwā al-‘Ulamā’ ḥaula Fairūs Kūrūnā*, Dār al-Bashīr, 2020.
- 28 「厄災のアザーン」が注目を集めるなかで、イスラム法学者たちが積極的に紹介し始めたのが、「厄災の法学 (fiqh al-nawāzil)」というイスラム法学の分野である。過去の議論を踏まえ、権威の確立した見解に依拠し、それを応用していく形で個別具体的な問題に対応すべきであるというのが、一般にイスラム法学の基本的な姿勢だとされる。しかしながら、未曾有の災害が発生するなど、危機的な状況が起き、過去の経験、論議の蓄積に依拠することができない事態に直面した際には、法学者はみずから積極的、能動的に解釈をし、現実の要請に応じていくという考え方がこの特殊な分野を支えている。コロナ禍において、イスラム法学者たちは各国の医療の専門家、さらにはWHOなどの専門機関の見解を積極的に紹介した。
- 29 このアザーンが「厄災のアザーン」と呼ばれるものであり、それがムハンマドの行ないに由来することについて、その後イスラム法学者は繰り返し、人々に説明しなければならなかったことはこれを物語っている。

## The Islamic Call to Prayer, Voice Shaping a Community

Kumiko YAGI

### Summary

As R. Murray Schafer discussed, sound shapes and identifies a community. A Muslim community is no exception. The importance of orality in Islam is undisputable: Quran is to be memorized and recited, rather than read. Muslims are supposed to pray five times a day, and they know when to pray, thanks to the Adhan, the call to prayer made from the Minarets of mosques. The sounds of Quran recitation and Adhan work as a boundary marker of a Muslim community. It is particularly so when Adhan is made in a place where Muslims are a religious minority. Significantly, in Adhan, the exact Arabic words of the Islamic declaration of faith are included. Adhan declares the unity of God and the prophethood of Muhammad, and thus regularly shapes the experience of a Muslim community. This was ascertained when a part of Adhan was changed, since mosques were closed and congregational prayers were canceled under Covid19.

### キーワード

イスラム アザーン 礼拝 共同体 音 声 信仰告白 コロナ禍

### Key Words

Islam Adhan prayer community voice sound declaration of faith Covid19